

氏名	下平尾 勲
学位の種類	博士（商学）
学位記番号	第3813号
学位授与年月日	平成12年6月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学位論文名	信用制度の経済学
論文審査委員	主査教授 佐合 紘一 副主査教授 片岡 尹 副主査教授 青山 和司

論文内容の要旨

わが国の貨幣・信用制度は、バブル期の過剰投資・生産過剰の調整過程としての不況の長期化、株式や不動産等の擬制資本価格の暴落にともなう巨額の不良債権の発生と金融機関の再編成、アジア通貨危機による設備投資の回収不能等により、根底から動揺させられている。このような金融不安という状況を反映して金融現象に関する書物が多く出版されているが、最近の現象を記述したものが多く、基本的な理論にまで言及したものは少ないように思われる。

そこでまず問題となるのは、貨幣・信用制度とは何であり、それがいかに形成され、どのような役割を果たし、その限界は何であるかということである。貨幣・信用制度は、資本主義の発展の中で形成されたものであり、資本主義発展の堅実な枠組であって、その動揺は、生産、流通、分配、消費のいずれに対しても強い影響を及ぼすのであるが、それは、現実的、具体的にできあがった複合的な産物であった。そこで、発生史的に理論的研究を行う必要があり、その結果として現実的、具体的かつ多面的な役割・地位と意義を解明することができる。本書は、従来の貨幣・信用論研究を現代の状況に即して再評価し、その研究の意義と限界を示し、論点をいっそう明確にするとともに、現代の金融に関する問題を基礎理論から体系的にとりあげていこうという問題意識をもって書かれた。

第1章 信用制度の形成と発展では、まず信用制度というのは何であるか、それがいかにして形成されてきたか、それがどのような意義と役割をもつかについて論じた。

第2章 信用制度下の蓄蔵貨幣では、兌換を停止された銀行券は蓄蔵貨幣となりうるのか、資金の存在＝蓄蔵貨幣が信用制度の形成の軸点であるのか。銀行の自己資本＝蓄蔵貨幣が通貨の供給量を規定するというような議論が行われているが、そもそも蓄蔵貨幣とは何か、蓄蔵貨幣は資本主義の発展によっていかにその性格を変化させていくか、信用制度下ではいかなる性格をうけるか等という蓄蔵貨幣に関する基本的な問題をとりあげた。

第3章 信用制度と銀行券の流通においては、信用制度下において銀行券が流通する根拠と仕組みを論じ、現金通貨と信用通貨との関係、ハイ・パワード・マネーとM2+CDの関連性についてとりあげた。

第4章 国際通貨制度と世界貨幣では、研究をすすめるにあたって二つの問題意識があった。一つは金との交換を停止された米国ドルが30年近くにわたって国際通貨として流通している。この流通の根拠は何かという問題意識である。もう一つは、今日の各国の信用危機の原因の一つは、実は米国ドルを中心とした国際通貨制度の危機にあった。この二つの問題意識のもとで、あらためて世界貨幣とは何か、不換通貨ドルの流通の根拠と条件は何か、変動相場制のもつ意義は何か、をとりあげた。

第5章 現代の信用危機では、経済成長期の国内の信用危機とは異なって、国際的な経済環境の変化の視点から国内の金融危機について論じた。今日わが国における金融危機が議論されているが、根本的には

米国における1980年代の信用危機に発生の原因があった。米国は経常収支の均衡のために黒字国に対して内需拡大と市場開放を、さらに規制緩和という名のもとに既存制度の変革を要求したのである。この制度変革がわが国経済の先行き不安の最大の要因となった。不況下の金融バンの推進は、金融の効率化、利用者の利便性の向上ではなく、金融機関の過当競争、金融の不安定化をもたらし、さらに金融の歴史性や現在の果たしている役割を評価しない画一政策を導入することとなり、わが国の金融制度だけでなくわが国経済の発展にとって憂慮すべき事柄であることを示そうとした。

論文審査の結果の要旨

本論文は、国際通貨制度の動揺と国際金融危機の連鎖的発生、バブル経済の形成と崩壊、長期の経済停滞と信用危機の発生など「現代の金融に関する問題を、基礎理論から体系的に取り上げていこうという意識」（3頁）に基づいて書かれている。とくに新しく登場してくる現象として重視されているのは、兌換を停止された銀行券による蓄蔵貨幣機能と不換のドルによる国際通貨機能である。

蓄蔵貨幣と国際通貨の両機能については、金そのものでなければ機能できないと長らく考えられてきた。しかし現実とのギャップが大きくなり、最近では貨幣論、信用制度論の重要な論点として多くの研究が行われている。これまでの多くの研究では、二つの現象はそれぞれ独立に論じられてきたが、本論文では二つの現象を共通の視点から同時に検討している。本論文の特徴であるとともに、斬新で高く評価できる。

本論文では二つの論点を扱う共通の視点を、マルクスの貨幣論は「貨幣だけを取り出して貨幣の機能規定を与えるのではなく、商品流通の諸条件との関連において貨幣の形態規定を与える」（242頁）という点においている。この点に関する従来の研究を、『資本論』第1巻の貨幣論次元での規定に依拠しすぎていると批判し、蓄蔵貨幣および国際通貨の本質を発達した信用制度のもとで説明することにより、新しい現象を統一的に把握しようとしている。主として第2章と第4章でこれらの論点が扱われており、本論文の重要な部分となっている。

第1章では、信用制度は資本主義的生産と流通に関わる現実資本全体に対応する制度として形成され、基礎範疇は利子付き資本であることが強調される。第2章では蓄蔵貨幣の原理的な考察が行われ、現代の諸問題を説明するための基礎理論が提示されている。『資本論』第3巻に依拠して、信用制度が発展すると蓄蔵貨幣は利子付き資本となる、すなわち蓄蔵貨幣が銀行の預金貸付業務のなかに組み込まれることによって、蓄蔵貨幣が貸付資本に転化していくと主張される。さらに銀行券の流通依拠は金との交換性にあるのではなく、一般的流通における流通手段としての機能にあることが強調され（とくに第3章）、そのことを前提として、不換銀行券の流通根拠は国家の強制通用力ではなくて、流通手段の瞬過性にあるという論点が提示される。こうした不換銀行券の認識を踏まえて、健全な信用制度のもとでは不換銀行券も蓄蔵貨幣として機能しようと主張するとともに、不換通貨ドルの流通根拠という問題説明の布石がなされている。

第4章では国際通貨が扱われるが、ここでも「国際的な商取引の拡大の結果として国際通貨が発生し、発展してゆくのであって、金準備や金との交換性から発生するのではないというべきであろう。外国為替手形が流通し、相殺されるかぎりでは、為替手形が現実的に金と交換されるかどうかは問題とはならない。」（273頁）と述べ、不換通貨が国際的に流通する根拠も、商品流通における貨幣の瞬過性に求めている。第5章ではこれまでに提示されてきた基礎理論に基づいて、現代における金融問題が分析されている。

本論文ではとくに国際通貨について、外国為替取引からの展開に関する最近の研究成果についてほとんど言及されておらず、また国際決済は国内決済と明らかに異なる側面があることへの注意が不充分であるなど、残された課題も幾つかみられる。しかし商品社会の「共同体的性格」の強調と、貨幣の「素材」ではなく「関係」の重視という点で視角は一貫している。また本論文は上向的な体裁をとっているが、現実

に機能している信用制度から俯瞰しており、これまでにない新鮮な分析となっている。

以上の点から審査委員会は、本論文は博士の学位（商学）を授与するに値すると判断した。